

【第一章】



漫画の原型。

- ◎ 笑いと風刺からはじまった「漫画の原型」とは。
- ◎ 現代漫画のスタート地点。
- ◎ 古典『来るべき世界』を読み解く。

笑いと風刺からはじまった 「漫画の原型」とは。

歴史上、最初の漫画家は旧石器時代人で、彼らはフランスやスペインの洞窟に動物の描写画を描いたと言われる。

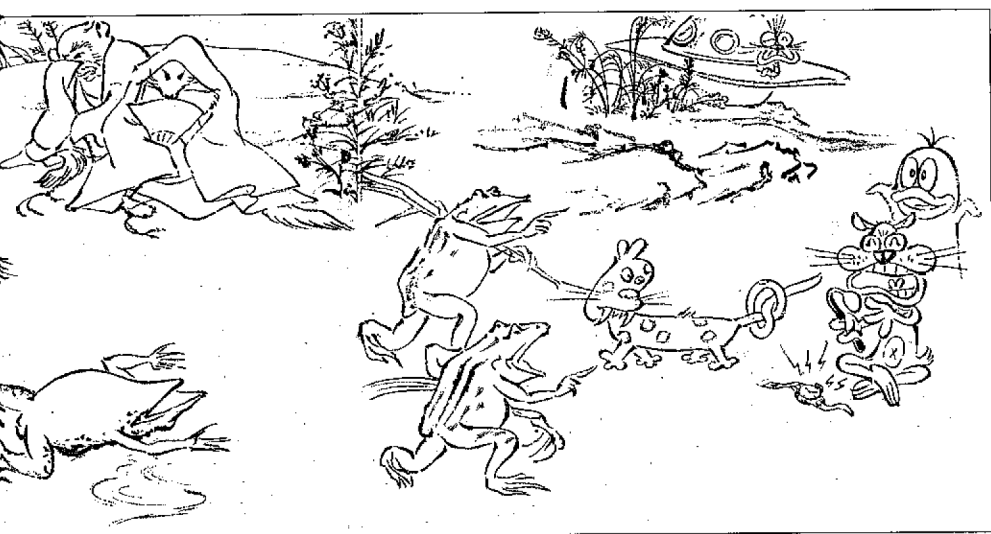
今から一万三千年も前のことだ。なぜ、それを「漫画」と書いたかといえば、動物だけではなく、(動物に仮想した人間のおどけたポーズ)なども描かれていたからである。

スペインのアルタミラ、フランスのラスコーの洞窟絵画はあまりにも有名だ。こうした原始的な洞窟絵画はアフリカのサハラ、アトラス、リビア地方などでも多数発見された。

しかしここで我々が学んでいこうとするものは、そうした絵画の発展を追うことや、そこから枝分かれして発達した戯画の細密な歴史ではない。

より近代に発生した戯画・風刺絵画が、印刷技術の発達により、大量に漫画として人々の手に渡り、読まれるようになった状況を見ていこう。

まず登場するのは日本の絵巻である。



『鳥獣戯画』が何故、日本の漫画の原点と言われているのか？

京都の高山寺が所蔵する国宝の鳥獣人物戯画(四巻)は、俗に『鳥獣戯画』と呼ばれる。平安後期(十二世紀半ば)から鎌倉前期(十三世紀半ば)にかけて、鳥羽僧正によって制作されたといわれる絵巻である。

この第一巻が、一般に『鳥獣戯画』と言われ、第二巻は鳥類や獣のスケッチであり、戯画ではない。第三、四巻は藤原期の僧侶や一般人の遊び狂う様子を描いたものとなっている。

画はすべて白描画と呼ばれる墨の線描きで、色彩はない。

ここに描かれた動物たちは、主として蛙は当時の僧侶、兎は貴族として《擬人化》されている。僧侶がギャンブルに夢中になったり、弓の遊びや乗馬にうつつを抜かず様や、大僧正らしい大猿が、沼で水浴びするところへ、兎の貴族が背中洗いに水を汲んで、おべっかを使う場面など、いかに藤原政治下の世界が墮落していたかが見てとれる。

作者の鳥羽僧正は、こうした表現により、政治が藤原貴族と一部僧侶によって成立していることに對し、僧の政治参加を批判したのであった。

● 筆者・長谷邦夫が描いた『鳥獣戯画』のパロディの一部

▶ 昭和49年、『話の特集』(6月号)に発表した。右はしのベラマツチヤ(レックス・ゴン)赤塚不二夫)が超能力で「スポン曲げ」をして遊んでいる。オバQは背後霊だ。中央のベンカゑるたちはアルツハイムの銀ひすき。Xメンタワフネがりのオマワリさんはポリを監視している。小説家のカエルが文句をつけて抗議しているのだ。



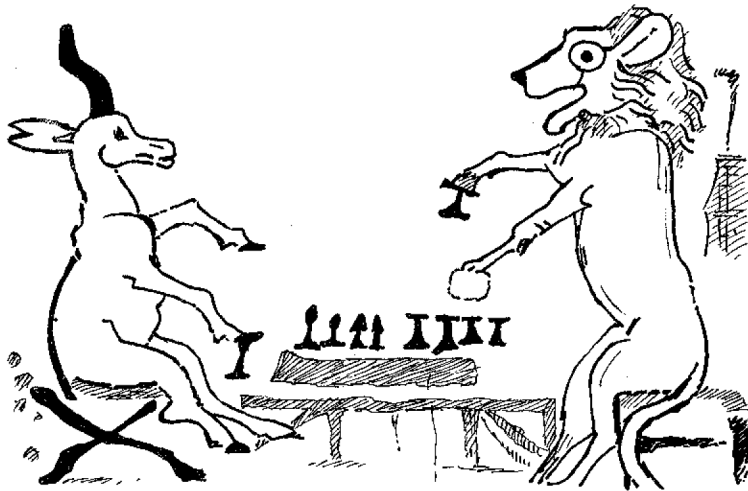
つまりこの絵巻は単純な戯画、らくがきではなく、場面の構成や展開に《物語》と《風刺》があるのだ。

そうした内容を持った風刺画として、日本に現存するものでは『鳥獣戯画』がもつとも古い。そのため、この絵巻が日本の漫画の原点と言われるのである。

鳥羽僧正は醍醐天皇の皇子、左大臣高明親王四世の孫にあたり、『宇治物語』の作者と言われている。職業画家ではなく、文筆家としての仕事もした大僧正が、政治風刺画を描いたということに注目したい。

作者鳥羽僧正は、絵巻の中で木の枝にとまったフクロウとして登場している。昼間は眼が見えないとされる鳥として、高貴な政治家や僧侶たちの不行跡を見つめているというギャグも、卓抜なセンスを感じさせる。今日観賞しても十分に笑えるという点で、『鳥獣戯画』は日本漫画史に残る最高傑作と言えよう。

明治・大正時代、人々はこうした形式の絵画表現を《鳥羽絵》とか「おどけ絵」「狂



エジプトの動物戯画 (BC 1000年)

長谷. 写

画「滑稽画」「ボンチ」などと呼んだ。
「ボンチ」(または「ボンチ絵」)は一八六二年(文久二年)に、イギリス人チャールス・ワーズマンが執筆・作画・編集し創刊した『ジャパン・パンチ』という漫画雑誌がもとになった言葉である。

古代エジプトにあつた動物戯 画絵巻『死者の書』

古代エジプト人は彼岸信仰をいだき、来世の生活のために死体をミイラにし、その墓に装身具や衣服等を副葬したことはよく知られている。

そうした品物の中に、死後の生活のガイド・イラスとも言える絵巻があつた。これらはパピルス(ナイル河の葦で作られた紙)に描かれた動物戯画で『死者の書』とも呼ばれ、有名な作品は大英博物館、イタリアのトリノ美術館に所蔵されている。

前者には、ライオンが王として、後宮の女性に羚羊、狐はミュージシャン、猫は側

室のご機嫌をとる高官などとして描かれている。この図が社会風刺画であることは言うまでもない。

トリノの作品では、上段にライオン・ワニ・猿の楽隊などが描かれ、王の姿をした馬が罪人を断罪しているシーンも見られる。

下段には猫が鳴の大群におしまくられているカットなどがあり、階級制度に対する風刺の精神がうかがえるのだ。この絵巻はBC1000年頃に成立したと考えられている。

カイロ美術館所蔵の動物戯画では大ねずみのお供をする猫なども描かれ、そこには信仰精神とはかけはなれたギャグ・ユーモアの精神が存在している。

BC500年頃の古代ギリシャでは、そうした戯画が壺や水差し、かめなどの装飾画として描かれた。それらの主題は飲食やダンス、売春や性的祭礼の様子、奴隷裁判、喜劇的な寓話などである。

特に注目したいのは悪魔とか怪物といった空想的なキャラクターの戦いが描

かれたということだ。『鳥獣戯画』の(擬人法)的表現は、欧米も変わるところはないが、既にフアンタスティックな表現に及んでいたのである。

日本におけるこうした怪奇的な描写が絵巻物として成立したのは室町時代で、『百鬼夜行絵巻』(土佐光信の作と伝えられる。京都大徳寺真珠庵蔵・重要文化財)が有名である。

これらが描かれた背景には、当時の宗教や信仰が深く関係している。しかし社会の発展と共に政治的権力や宗教組織が強大になってくると、彼ら作者に対する批判は強く封じ込められてしまう。

十五、六世紀までのヨーロッパにおける風刺的な絵画は、わずかに僧院の経画本(マニユスク립ト)のさし絵や、児童向けの寓話本、農民版画などに描かれるくらいであった。

近代の漫画が開くのはイギリスの産業革命やフランスのフランス革命期(一七八九〜一七九九)以降のことである。